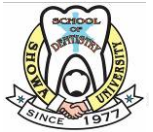




発行責任者: 歯学部長 宮崎 隆, 編集責任者: 広報委員長 井上 富雄
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL: 03-3784-8000
ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp>



放射線の被曝線量限度はどのように決まるか？

昭和大学歯科病院長 岡野友宏

いま、福島で起きていることは出口のわからない不気味な不安を私たちに与え続けています。放射線被曝に伴う発癌は主として広島・長崎の原爆被爆者について研究され、そのリスクが推定されています。最近の報告によれば、ある一定期間の累積で50-100 mSv, あるいは1回で10-50mSv を超える被曝となると、線量の増加とともにがんのリスクが増加すること、また10mSv 以下の被曝では不明だがリスクがあると考える方が合理的であること、現時点ではいわゆる「しきい値のない直接仮説(linear non-threshold, LNT model)」以上に信頼に足る仮説はないとしています(Brenner 他 PNAS 2003; 100: 13761)。これに基づくと、放射線被曝が加わった場合、増加する致死がんの数は100mSv の被曝で1,000人中、5人と推定されます。この仮説は久しくICRP, 国際放射線防護委員会によって支持され、線量限度等はこれに基づいて決められています。



一般人の年間の線量限度は1mSv です。これには自然放射線や医療に伴う被曝は含みません。このように線量の低い理由は集団には放射線感受性の高い胎児や小児が含まれること、被曝に選択の余地が無くしかも利益を受けないこと、個人管理がなされておらず、また一生、被曝し続けることなどです。一方、放射線取扱者の限度を年平均で20mSv とし、仮に50年働き続けたとしても1,000mSv を超えず、安全産業の基準とされる年間平均死亡率の 10^{-4} も超えない値としています。しかし緊急の場合、ICRP は各国政府が特例措置をとれるように配慮しています。今回、3月21日付の“Fukushima Nuclear Power Plant Accident”という報告(ICRP ref: 4847-5603-4313)では既勧告通り、住民に対して緊急事態発生中で20-100mSv, 事故が安定化に向かう時期では1-20mSv の範囲で線量限度を設定できるとし、またその後は1mSv に戻すようにとしています。現在、政府が計画的避難地域の線量を20mSvとしている根拠がここにあります。最大値を採用していること、いつまでもこの値を継続できないことに注意すべきです。なお、救助等作業員の線量限度は骨髄死などの急性障害

が発生しない500-1,000mSv としますが、救命に当たっては承諾した志願者であれば救命の利益の方が高い場合に限り限度を設けないこともできます。現在、原発作業員の線量限度は平常時の年間最大50 mSv を超えた250mSv を設定していますがその根拠は私には不明です。

さて線量単位として実効線量が用いられています。これは発癌などの低線量晩発影響を考慮して決められた量です。アルファ線や中性子線といった異なる放射線が混在しても使用できます。被曝には外部被曝と内部被曝があり、前者は地表に降下した放射性核種からの主としてガンマ線による被曝です。各地域のHP等からその線量を知ることができます。後者は呼吸や食物から体内に取り込まれた核種からの被曝で、原発から放出された放射性核種の種類とその分布、住民の生活様式等からこの線量を推測します。この作業は困難かも知れませんが、大幅な変動を認めた上で結果を公開すべきです。

原発は電力を供給する公共性の高い施設です。その事故で日常生活に混乱を来すとはいえ、何の利益も生じない福島の子供たちに一般より1ケタ以上も高い線量を「許容」するのは社会的公正さを欠きます。低線量だから「安全」という問題ではありません。「学校」は強制力を伴い学童にとって選択権はないので、「学校」自体を例えば会津地域に移動する位の決断があってもいいのではないかと考えます。

スチューデント・インストラクター制度が実施されます。

教育委員長 井上美津子

今年4月より、本制度が施行されました。この制度は、学部学生に、下級生の授業実施補助や大学行事・学生会活動の支援業務等の機会を提供し、勉学意欲の高揚やモチベーションの向上を図るとともに、教育・研究・医療の指導者になるためのトレーニングの機会をも与えようというものです。従来も、先輩から後輩へ情報提供する機会は多々ありましたが、大学の事業として行うことになりました。すでに、富士吉田の新生歓迎会や各学部のオープンキャンパス等で、様々な募集が行われています。ポータルサイトで募集内容が提示され、希望する学生が申請を行う形になります。参加学生には大学から交通費等の実費支給とともに、感謝状が贈呈されます。後輩の教育に参加しながら自らの指導能力を高めるため、歯学部生も本制度を活用していただきたいと思います。

科学研究費補助金が内定しました

研究活動委員長 上條竜太郎

去る4月1日ならびに28日、文部科学省と日本学術振興会は、平成23年度科学研究費補助金の交付内定を公表しました。昭和大学全体では採択件数206件、採択金額は2億9,895万円でした。歯学部の交付内定状況は下表の通りで、交付内定金額は昨年度と比較して3,467万円の増額です。なお、歯学部の交付内定金額は、昭和大学全体の交付内定金額の49.5%にあたります。

今年度日本学術振興会は法改正により学術研究助成基金(以下「基金」)を新設しました。それに伴い基盤研究C、若手研究Bと挑戦的萌芽研究(新規課題のみ)は本基金から研究費が交付されます。それに伴い、会計年度にとられない契約が行えるとともに、研究の進展に合わせた研究費の前倒し又は次年度使用など、柔軟な執行が可能となります。ご不明な点は、歯学部研究活動委員会、財務部研究助成課にお問い合わせ下さい。

平成23年度 歯学部 科学研究費内定状況

研究種目	平成22年度			平成23年度		
	採択件数		内定金額	採択件数		内定金額
	新規	継続		新規	継続	
基盤研究A	0	0	0	0	0	
基盤研究B	1	3	18,000	3	2	29,300
基盤研究C	10	31	41,600	14	25	50,500
若手研究B	15	22	48,900	18	21	52,700
研究活動スタ		3	2,850	申請中	8	8,720
萌芽研究	0	2	2,100	4	1	6,900
合計	26	61	113,450	39	57	148,120

(内定金額は新規・継続の合計で、単位は千円)

(採択金額は直接経費のみ)

D3研究入門の優秀者が表彰されました

教育委員長 井上美津子

歯学部3学年の「研究入門」は年度末の2月から3月にかけて行われる選択実習です。この実習では、歯科医学、とくに基礎歯学の専門性の高い研究に直接触れることによって、歯科医学のEBMを理解し、研究マインドが育つことが期待されています。平成22年度の研究入門では、14名の学生が口腔病理学、口腔微生物学、口腔生化学、口腔衛生学、口腔解剖学などの各教室で2週間の研究を行いました。

その成果としての研究報告書・研究日誌から評価が行われ、成績優秀者には5月の教授総会で表彰が行われました。成績優秀者3名とその配属教室は以下の通りです。高橋那緒(口腔微生物学教室)・田村明日香(口腔病理学教室)・井上 薫(口腔微生物学教室) なお、最優秀の高橋さんは、日本歯科医師会主催の学生・クリニシャン・リサーチプログラムの本学代表として選出されました。

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の中間評価が行われました

研究活動委員会 上條竜太郎

本学が「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の補助を受けて推進している研究プロジェクト「分子的理解に基づいた口腔癌の先端的研究—発症メカニズムの解明からQOLの向上を目指した包括的リハビリテーションまで—」(研究代表者:立川哲彦名誉教授)が、文部科学省による中間評価を受けました。中間評価は本学が提出した中間報告書に基づいて、2名の審査員による3段階評価(A, B, またはC評価)で行われ、評価結果は2名ともB評価でした。

本プロジェクトは平成24年度末までの計画です。今回の中間評価を受け、研究計画等の一部修正を進め、研究のさらなる推進を図ります。

慶應大学病院 歯科口腔外科で選択実習を体験しました

歯学部6年 石川貴幸

医科病院の中の歯科ならではの外来を肌で感じたことと実習を希望しました。病院で最も印象に残ったのが、患者の中の一人ではなく、〇〇さんに対するオーダーメイドの治療を行っている理想的なチーム医療の姿でした。院内PHSや手紙を用いることで医科の先生と互いの連携が迅速かつ密となり、スムーズな情報のやり取りで診療を行うことで、患者さんが安心してリラックスした診療風景が見られました。手術は徹底的な清潔を保ち、安全管理を図った上で行っていました。特に印象に残っているのが、上顎角化嚢胞性歯肉腫瘍の症例で、入院管理や各種検査を経て、迅速病理診断を含めた手術の流れを知ることができました。加えて下顎歯肉癌の超選択的動注化学療法では、造影CTで顎動脈、顔面動脈にカテーテルを通し、抗癌剤を注入し、術後の全身管理といった化学療法の流れも知ることができました。毎週曜日ごとに専門の外来があり、その外来後にある、ペリオ・TMD・粘膜疾患・口腔外科・補綴のカンファでも数多くの症例に触れられ勉強になりました。また、一般開業医では手に負えないような症例や全身疾患のある患者さんが多く紹介されてくるので、クラシカルな治療から応用の効いたアドバンスな治療と幅広い治療を見学することができました。数多くのケース溢れる外来やカンファを通し、生涯学習の礎となる格好のフィールドワークの舞台となることに疑う余地はないと思います。口腔を健康にする目的だけでなく、患者さんのQOLの向上に寄与する手段とされる歯科医師を目指したいです。

(写真は中川種昭 診療部長)



歯科医療コミュニケーション教育が行われました

コミュニケーション教育推進委員長 片岡竜太

「歯科医療におけるコミュニケーションについて考え、歯科医師に必要な態度とコミュニケーション技法を身につける」を一般目標とした6年一貫の「歯科医療コミュニケーション教育」を同委員が中心になり、東京SP研究会の代表佐伯晴子さんのご協力を得て2～5年生に対して行っています。

4月に2年生に対して2回の授業を行いました。1回目はアデレード大作成の歯科治療恐怖症の患者が治療をはじめる前に気分が悪くなってしまう内容のビデオを見せました。学生は2人ペアになり、それぞれ歯科医師役、患者役としてビデオをみた後、お互いに何を感じたかディスカッションをしました。2回目は3つのグループに分かれて、前回見たビデオで何が起こったのか？なぜ起こったのか？どうすればよいのか？を各自考えた後で、グループでディスカッションを行い、全体発表をしました。学生は歯科医師が患者の様子をしっかりと観察せずに、一方的に医療面接を進めているという問題に気づきました。その後で歯科治療恐怖症の昭和晴子さんに対する医療面接をどのようにおこなうかグループで検討し、各グループの代表が模擬患者の佐伯さんと実際に医療面接を行いました。

授業後のアンケートと電子ポートフォリオを読むと、患者の話をしっかりと聞くことの大切さと歯科医療に関する知識や年上の人と話す経験が不十分であることさらに歯科医療におけるコミュニケーションの難しさに気づいた学生が多くみられました。これは良い意味での動機づけになったようです。最後に、佐伯さんに患者の立場から、歯科医師にふさわしい身だしなみや態度による第1印象の重要性、しっかりと話を聞いてもらえた喜びを学生に話してもらいました。

3年生で「医療面接の基礎」、4年生で全員が模擬患者さんと10分間医療面接を行う「全身の医療面接」、5年生で「医療面接・指導医への報告と患者説明」を行い、学生が本学のコンピテンシーである「患者のプライバシーに配慮し、適切なコミュニケーションのもとに信頼関係を築き、患者の主訴や治療に対する希望、心身に関する病歴を聴取し、記録することができる。」ようにコミュニケーション教育推進委員会を中心に指導を続けていきます。



昭和大学災害医療救護チーム6次隊に参加して

高齢者歯科学教室 桑澤実希

義歯紛失に伴う摂食障害が多いという報告を受けて、第6次の歯科救護活動は仮義歯製作が主になると想定し、出発前に医局をあげて準備を行いました。

仮義歯製作は初診時に印象採得を行い、模型上で基礎床とクラスプを製作しておきます。そして、次の受診時にあらかじめ製作しておいた人工歯ブロックを審美性・機能性を考慮して口腔内で配置し、形態修正して完成させます。強度は低いですが、地元の歯科医療が復旧するまでの一時的な使用には耐えられると思います。

5日間の活動期間中に87名の診療を行いました。診療内容の84%が義歯補綴系に集中していましたが、義歯を紛失した患者の多くは少数歯残存で、顎位が不安定な難易度の高い症例でしたが、途中から歯科技工士を帯同した自衛隊歯科診療チームが加わったために仮義歯の生産量と精度が上昇しました。また、第5次隊までに口腔衛生状態についての啓蒙活動が繰り返し行われていたため、歯周炎等を主訴に受診される方はごくわずかでした。

今回の活動を通して高い専門性と歯科衛生士・歯科技工士を含む柔軟なチーム医療の必要性を強く感じました。人々の絆に深く感謝するとともに、現地の一刻も早い復興を祈ります。



診療統計(平成23年4月分)

医事課長 久米徳明

	患者数	1日平均	前月1日平均	前年1日平均
外来患者	17,121	684.8	696.5	740.2
入院患者	351	11.7	15.6	15.6

受賞

広報委員長 井上富雄

第4回 IADR DMGC-J 記念賞

・歯科保存学教室 助教 田中玲奈 先生

日本骨代謝学会 IOF-ANZBMS2011 Travel Award (第2回アジア太平洋骨粗鬆症骨会議-オーストラリア・ニュージーランド骨代謝学会学術大会)

・歯科補綴学教室 大学院生 秋山智人 先生

・口腔生化学教室 大学院生 宮本阿礼 先生

北部病院歯科が開設されました

北部病院歯科 渡辺仁資

この度、昭和大学横浜市北部病院に歯科診療室が開設いたしました。今回、この開設にあたり就任したメンバーは歯科医師として私と永山健太郎先生、歯科衛生士として木村有子さんと堀内幸世さんの計4名です。我々は、3月1日より約1か月間、限られた期間で歯科診療室開設に向けて、診療室の設計、歯科用電子カルテの新設、消毒業務や診療連携などの打ち合わせ、材料の準備などを進めてまいりました。また、開設にあたり近隣歯科医師会へ、岡野病院長や佐野教授をはじめ、荒木田事務長など多くの方々と挨拶回りを致しました。その際、様々な先生方と意見交換をさせていただき、歯科診療室の診療にとっても有意義な話し合いをすることができました。準備の途中、3月11日の大地震にみまわれ、さまざまな機器の調達が滞ってしまいましたが、何とか開設に間に合うようになりました。現在もまだ、必要な材料が届いていない状態ではありますが、ほぼ診療には支障がない程度となっております。開設後患者は、毎日数人ずつ病棟や近隣の先生方からご紹介をいただいております。現在のところ、診療や連携面で大きな問題もなく診療をさせていただいておりますが、これもご協力いただいた方々のおかげであると思います。

最後に、昭和大学横浜市北部病院の歯科を開設するにあたって、ご協力いただきました多くの方々に深く感謝申し上げます。これからの診療についても、まだまだ若輩者のスタッフではありますので、温かく見守っていただくと幸いです。これからも、ご支援ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



英文 Newsletter vol. 4 が発刊されました

広報委員長 井上富雄

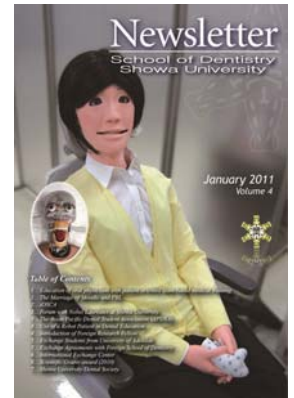
本学が開発した患者ロボットの「昭和 花子さん」が Newsletter 第4号の表紙を飾り、昨年の高尾山の天狗とはまた違ったインパクトがあるものとなりました。

掲載記事の内容は、宮崎学部長の巻頭言、本学に在外研究で半年間滞在された南カリフォルニア大学 Glenn Clark 教授と Roseann Mulligan 教授による on-line education, iOSCA, 本学で開催されたノーベル賞受賞者を囲むフォーラム、アジア太平洋歯科学会学生会議、表紙にも掲載されました患者ロボットを用いた教育、インドから留学された Jaideep Sur 博士、

Adelaide 大学からの選択実習生の受入、国際交流センターの活動、競争的外部研究資金の獲得状況、昭和歯学会の学会誌である Dental Medicine Research 誌の紹介です。

Newsletter 第4号は国際交流センターに保管をお願いいたしましたので、海外交流などの際にはお問い合わせいただき、是非ご活用下さい。

英文広報委員：宮崎 隆（歯学部長）、井上富雄（編集長）、Michael W. Myers、堀田康弘、松田幸子、野中直子、坂井信裕、滝口 尚



昇任・採用

広報委員長 井上富雄

小野康寛助教(病院長付)(歯科補綴)

行事予定

広報委員長 井上富雄

- 6月 3日（金）D2防災訓練
- 6月 4日（土）白菊の集い
- 6月18日（土）父兄会総会
- 6月25日（土）富士吉田寮祭
- 6月26日（日）富士吉田寮祭・富士吉田オープンキャンパス
- 7月 2日（土）昭和歯学会
- 7月 4日（月）夏季スポーツ大会壮行会
- 7月26日（火）4学部合同オープンキャンパス
- 7月29日（金）～31日（日）昭和大学教育者のためのW/S
- 7月30日（土）～31日（日）歯学教育者のためのW/S

編集後記

口腔衛生学教室 弘中祥司

また、今年も梅雨の時期がやって来ましたが、震災から早いもので2か月以上も経ちますが、今年の夏は猛暑の長期予報が出ています。節電グッズは、コンビニからデパート、電化製品・衣料品店まで沢山並んでいます。とくに扇風機はもう品薄とか。学生さんには、楽しい夏休みのはずが、残念かと思えます。

大学のキャンパスも節電モード全開です。現在、節電カリキュラムで旗の台の学生さんは朝8時30分から夕方5時までびっしり講義・実習を行って、7・8月を完全にお休みにするようになっています。学校法人である本学も被災地の医療支援だけではなく、事業社としての節電義務にしっかりと取り組んでいます。全国みんなが取り組んで、さらに一層の明るい未来を創りたいと願っております。さて私の体型も少し節電モードに切り替えて、スリムに猛暑を乗り切りたいです。